シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第19回

中部森林管理局技術普及課
井上日呂登

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

「苗畑」

植樹するための苗木は、古くは森林で自然に育った稚樹を掘り取って目的の場所に植える「山引苗」が主でした。明治時代に入ると苗木を育てる専用の畑である「苗畑」(戦前までは「苗圃」)が幾つも作られることになりました。

[上写真] 大正時代頃、七宗山菅ケ谷苗圃
(現在の岐阜森林管理署管内)

[下写真] 昭和初期頃、読書村大原苗圃
(現在の木曽森林管理署南木曽支署管内)

例えば木曽地方では伝統的な苗木を育てる手法が確立しておらず、明治二十年代に愛知県から指導者を招いたと記録されています。

昭和三十二年の苗畑での除草作業
(現在の南信森林管理署管内)

苗畑では多くの人が働き、幾つもの作業行程がありましたが、特に除草作業が労力の半分以上を占める時代もありました。これは除草剤が使用されるにつれて省力化されていきました。この他にも人力や牛により畑を耕す作業や苗木を掘り取る作業がトラクター等の導入により省力化されていきました。

明治時代以降スギやヒノキ、サワラといった苗木が主に生産されてきましたが、戦後はカラマツの生産が多くなりました。しかし昭和四十年代後半ぐらいから苗木の需要は減少していき、国有林では民間の苗畑で生産された苗木を購入して植える体制に移行していきました。

昭和30年頃、トラクターによる耕転
(現在の東濃森林管理署管内)

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。
これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むか～しの写真を紹介するサイトです。
当サイトへは、QRコードを読み込んでください。